

150年のあゆみ

すべては鉱山から始まった

挑戦と変革を積み重ね、社会基盤を支える古河機械金属グループ

1875(明治8)年の創業以来、古河機械金属グループは社会や産業の変化に応じて事業構造を変革しながら、社会基盤を支える技術と価値を提供してきました。鉱山開発に始まり、技術の応用、事業領域の拡大、そして構造転換へ――。その歩みは、時代ごとに社会課題に向き合い、求められる役割に応え続けてきた変革の歴史でもあります。

150年にわたる挑戦と変革の積み重ねは、現在の価値創造の基盤となり、これからの社会において求められる新たな価値の創出へとつながっています。古河機械金属グループは、先達から受け継いだ技術・精神をもとに、「社会の筋肉」として、これからも社会に必要とされる企業であり続けます。

鉱山経営への挑戦

近代化への貢献

創業2年後の1877(明治10)年、創業者・古河市兵衛は廃山同然であった足尾銅山を買収。欧米の近代技術を導入し、「運・鈍・根」の精神のもと粘り強くことに当たり、ついに産銅量が日本一となる鉱山に発展させました。銅の生産を通じて日本の近代化を支え、「電気の時代」を迎えた日本の転換期に足尾銅山は大きく貢献しました。古河機械金属にとって足尾銅山で培ったものは多く、そこでの鉱山開発技術が後の発展の礎となりました。



創業者 古河市兵衛



足尾銅山

環境・安全への対応

公害対応と「安全専一®」

国策として銅産出が求められるなか、1890年代に足尾銅山では公害問題が発生しましたが、最新の環境技術を導入してその解決に努めました。銅製錬の完全無害化は昭和時代となりますが、足尾銅山で開発された世界で初めて無害化された自熔製錬技術は、今も国内外で広く採用されています。また、足尾銅山では1912年(大正元年)にSAFETY FIRSTを「安全専一®」と翻訳して標示板を坑内外に掲示し、安全読本を配布するなど安全活動を推進しました。これが日本の産業界における安全運動の始まりと言われています。



「安全専一®」の標語

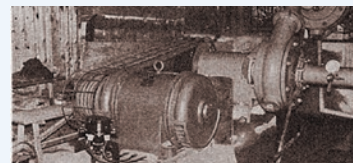


安全読本

鉱山技術の機械・素材事業への展開

鉱山開発技術の応用と多角化

鉱山開発は、採掘にとどまらず、鉱石の運搬、給排水、水処理、排ガス処理、副産物処理、動力源確保など、多様な工業分野の技術を必要とする総合的な事業でした。足尾銅山では最先端技術が導入され、やがて輸入機械の整備や部品製造を自ら行い、機械そのものを生産するようになりました。機械製造技術のほか、銅製錬技術や硫酸製造技術の応用が、当社の事業領域の拡大を支え、現在の機械事業と素材事業の基盤となりました。



ポンプ



クロールドリル



化成製品工場

事業構造の大きな転換

事業の選択と集中、海外展開

日本の経済成長とともに発展してきた当社は、エネルギー革命や資源を取り巻く環境の変化の中で、1970(昭和45)年に石炭事業から撤退、1973(昭和48)年に足尾銅山を閉山するなど、大きな転換期を迎えます。こうした変化に対応し、機械・素材分野に成長領域を求めていきました。1987(昭和62)年にはユニック事業を、1990(平成2)年には米国にさく岩機事業を取り込み、1997(平成9)年にはタイにユニック製品の製造会社を設立し、機械事業の拡大を加速させていきました。2005(平成17)年にはグループ経営体制へ移行、事業ポートフォリオの再構築を進め、現在の事業基盤を確立しました。



足尾銅山を閉山



ユニック事業に進出



北米のプレカ製造会社を買収

環境・社会課題への貢献

環境と調和した豊かな社会の実現

当社グループは機械・素材事業を中核として、様々な社会課題の解決に取り組んでいます。鉱山開発を起点として培ってきた技術をもとに、国土強靱化や防災・減災等のインフラ整備をはじめ、気候変動や生産年齢人口の減少など、様々な社会課題に対し、その解決に向けた製品・サービスを提供しています。近年では、無人化・省人化に向けた機械製品へのIoT技術の活用、AIの進展を支える高機能材料の供給などを通じて、社会基盤の高度化にも貢献しています。当社グループはマーケティング経営を推進し、創造的解決力で、安全・快適で環境と調和した社会の実現に貢献するとともに、社会的価値と経済的価値を両立する企業として、社会に必要とされる存在であり続けていきます。



トンネルドリルジャンボ



ベルトコンベヤ



高純度金属ヒ素



亜酸化銅

明治

1875 草倉銅山(新潟県)の経営を開始
1877 足尾銅山(栃木県)の経営を開始
1894 下山田炭鉱(福岡県)で石炭事業へ進出
1900 足尾銅山に機械工場を設置し、機械事業へ進出

大正

1914 日本で最初にさく岩機を製作
1918 古河合名会社の鉱業部門を独立し古河鉱業(株)を設立

昭和(前期)

1944 化学事業に進出
1944 足尾銅山機械部門の小山工場を建設
1950 さく岩機部門の高崎工場を建設
1962 高純度金属ヒ素の研究開発が完了し、販売を開始

昭和(後期)

1970 石炭事業から撤退
1971 吉井工場を建設(建設時はボウリング事業)
1972 電子部門のいわき工場を建設
1972 足尾銅山を閉山
1973 ユニック事業に進出((株)ユニックを買収)
1987 足尾での銅精鉱による銅製錬終了
1988

平成

1989 社名を「古河鉱業(株)」から「古河機械金属(株)」に変更
1990 米国のプレカ製造会社を買収
1997 タイにユニック製品の製造会社を設立
1998 オランダにさく岩機製品の販売会社を設立
素材総合研究所を設立
2003 中国にユニッククレーンの製造販売のための合弁会社を設立
2005 事業持株会社体制に移行

令和

2025 創業150周年
新たに企業理念を制定
2035年ビジョン[Vision F 2035]を策定
2026 (株)アーステクニカを株式取得により連結子会社化

古河機械金属グループの概要（2026年3月末時点）

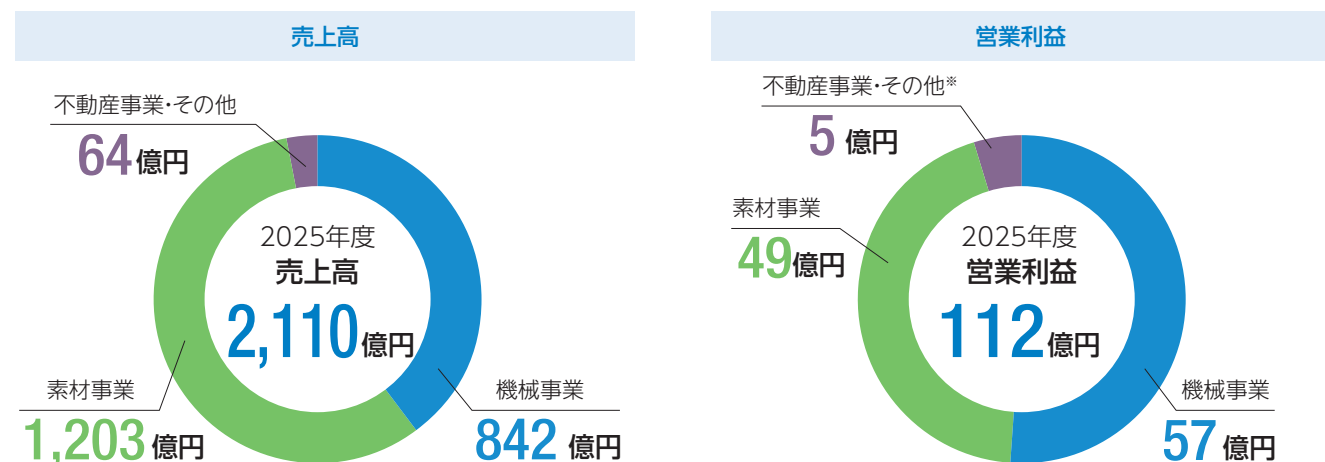
古河機械金属グループは、1875年、創業者・古河市兵衛による草倉銅山経営に始まります。足尾銅山では水力発電や電化など先進技術を導入し、日本一の産出量を誇る銅山に。その後、1900年からは機械事業に進出し、鉱山開発に必要な機械を開発。1973年の足尾銅山閉山後も事業を多角化し、機械と素材を中心とした事業ポートフォリオに変革。1989年には社名を古河機械金属(株)に変更、新たなスタートを切りました。

2005年には6つの中核事業を分社化し、事業持株会社体制に

移行。激変する市場の中でグローバルな企業間競争に勝ち抜くため、グループ経営体制(子会社31社、関連会社9社)を採用しています。2026年4月には、(株)アーステクニカを連結子会社化し、機械事業の事業領域拡大と事業ポートフォリオの変革を進めています。

当社グループは、社会基盤の進化を支える信頼のパートナーとして、社会的価値と経済的価値の両立を目指し、今後も社会に必要とされる存在であり続けます。

事業構成



※「不動産事業・その他」の営業利益には、調整額を含んでいます。

創業
151 年
(2026年8月8日時点)

従業員数(連結)
2,883 人

グループ社数
40 社
(子会社31社、関連会社9社)

古河機械金属グループの強み・特長

強み ① 鉱山開発で培った技術

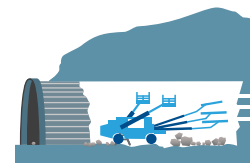
当社グループの歴史は、1875年に創業者の古河市兵衛が着手した銅山経営にルーツがあります。鉱山技術は、単に鉱石を採掘して銅を取り出すことにとどまりません。鉱石の運搬、給排水、水処理、副産物の処理、そしてそれらの動力源としての発電所建設など、あらゆる工業分野の粋を集めた総合技術であるといっても過言ではありません。

鉱山で使用するさく岩機、泥水を排水するポンプ、鉱石を粉砕する機械、水処理技術、排ガス処理技術、銅の副産物である濃硫酸や希少金属の生産など、現在、当社グループが国内で高いシェアを占めている製品のルーツは、鉱山技術にあります。



強み ② 社会インフラ整備に欠かせない機械製品群

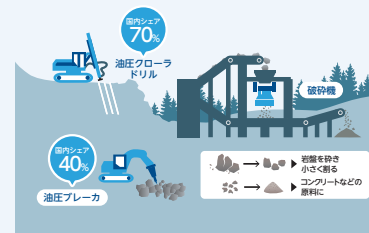
機械事業の製品群は、トンネル工事やコンクリート原料の採掘、土木・建築といった社会インフラの現場に加え、資源循環や排水処理などの環境インフラにおいても高いシェアを有し、幅広く使用されています。防災・減災、地球温暖化抑止、循環型経済実現、労働力不足への対応、安全・高効率作業の実現など、環境・社会課題の解決に貢献している点が、当社グループの競争力の基盤になっています。



コア事業と位置づける機械事業で注力する重点分野

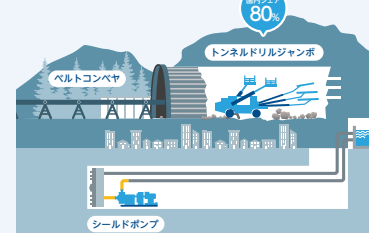
コンクリート

コンクリート原料の碎石や石灰石等の採掘現場では、岩盤を発破するための火薬装填用の孔を掘る油圧クローラドリル・発破して崩した大きな岩石を小割するための油圧ブレイカが活躍しています。また、岩石を破砕するプラントでは、ジョークラッシャやコーンクラッシャなどの破砕機、大きさにふるい分けするスクリーンが使用されています。



トンネル工事

岩盤が固い山岳トンネル工事では、岩盤発破のため岩盤に火薬装填用の孔を掘るトンネルドリルジャンボが使用されています。掘削した土砂の搬送には、省人化や環境配慮に貢献するベルトコンベヤの採用実績が増えています。地下トンネル工事ではシールド工法が用いられ、掘削土砂を水と一緒に圧送するシールドポンプが使用されています。



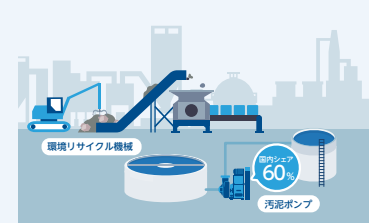
土木・建築現場

資材の運搬、積み下ろし、設置作業などには、一台で何役もの作業が効率的に行えるユニッククレーンが支持を得ています。トラックの入れない狭所や屋内での作業には、コンパクトで自走可能なミニ・クローラクレーンが対応します。ビル等の解体現場では、油圧ショベルのアタッチメント製品である、油圧圧砕機や油圧ブレイカが活躍しています。



資源循環

資源循環を支える現場では、破砕・選別工程を通じて廃棄物を再資源化する鋼屑用シュレッダ、RPF製造設備などの環境リサイクル機械が活躍しています。また、下水処理場や工場の水処理設備では、汚泥ポンプやスラリーポンプが安定した水処理を支え、資源循環の促進や環境負荷の低減に貢献しています。



強み ③ 便利で豊かな社会を実現するニッチな素材製品群

PCやスマートフォン等の高周波電子デバイス、顔認証や自動運転を支える車間距離測定等に使われる赤色LD(レーザーダイオード)の原料となる高純度金属ヒ素、熱伝導性が高く、電気を通さない絶縁性、均熱性、耐食性に優れた放熱部材で半導体製造装置用の部品として使用される窒化アルミセラミックス、船底へのフジツボ等の付着を防止する船底塗料用防汚剤で海洋汚染防止にも対応する環境配慮型製品の亜酸化銅、PCやスマートフォン等のプリント基板への高精度な銅めっき原料として採用されている酸化銅など、便利で豊かな社会の実現に素材事業の製品群が活躍しています。

